

小・中・都立学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

書 写

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

書 写	地 区	学 校 名	氏 名
◎	新 宿	余 丁 町 小	広 瀬 淑 識
	墨 田	第 四 吾 孀 小	岩 崎 和 代
	練 馬	上 石 神 井 小	石 川 まり子
	立 川	け や き 台 小	森 田 新 子
	保 谷	碧 山 小	佐 藤 恵 子
○	品 川	荏 原 第 四 中	平 川 恒 美
	中 野	第 十 中	吉 田 幸
	板 橋	赤 塚 第 一 中	堀 内 千重子
	足 立	第 十 中	三 橋 一 世
	東大和	第 二 中	島 田 斎 史

◎=世話人 ○=副世話人

担当 教育庁指導部指導企画課指導主事 河 野 庸 介
 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 新 藤 久 典

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想 1 研究の基本的な考え方	2
	2 研究の方法と手順	2
	3 研究の全体構想図	3
III	研究の内容 <小学校低学年>	4
	<小学校中・高学年>	6
	<中学校>	8
	<単位時間での学習の進め方>	10
IV	実践事例 <小学校低学年>	11
	<小学校中・高学年>	15
	<中学校>	19
V	中学校における書写指導の時間確保	23
VI	研究のまとめと今後の課題	24

研究主題

「自ら課題を見つけ、主体的に取り組める書写指導法の研究」

I 研究主題設定の理由

これからの学校教育においては、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる心豊かな人間の育成を図ることが求められている。したがって、書写教育においても、自ら考え判断し、行動できる豊かで創造的な資質や能力を育てる学習を展開する必要がある。

今日の児童・生徒の書写の実態としては、昨年度の研究から、形の整った正しい文字を見分ける能力に比べ、形を整えて書く能力がやや劣るという傾向のあることが明らかになった。また、作文やノートに書かれた文字を見ると、文字を丁寧に整えて書こうとする意識が低いと考えられる。現行学習指導要領では、毛筆による書写の授業時数の増加や、硬筆と毛筆との関連を図った指導に配慮すべきこと等が示されている。書写の授業の改善を図り、硬毛一体の指導を通して、日常に生きる書写力の向上を目指す必要がある。

書写指導のねらいは、次のように考えることができる。

- 文字を正確に理解し適切に書写する能力を育てるとともに、文字感覚を養い、文字に対する関心を深め文字を尊重する態度を育てる。

書写指導のねらいをこのようにとらえると、授業を通してただ単に書写についての知識・理解、技能を身につけさせるだけでは不十分であることが分かる。それとともに、文字に対する興味や関心を深め、文字を書こうとする意欲を高め、思考力や判断力を育てる学習を展開することが必要なのである。

本研究主題は2年目に当たる。昨年度は、児童・生徒の文字に対する意識や文字感覚の実態調査を基にして、各自の課題を明確に意識させることや、課題解決に向けての学習意欲を持続させるような指導法を追究してきた。本年度は、昨年度の研究成果を踏まえ、残された課題として示されていた視聴覚機器等を用いての学習基準の提示方法の工夫や、児童・生徒の実態調査を生かした指導法について研究するとともに、昨年度の研究成果である発展学習を取り入れることに留意しながら研究に取り組んだ。

「主体的に取り組める」ということは、本年度も児童・生徒自らが、「何を」「どのように」学んでいくかということを見出し、進んで学習できることであると考えた。児童・生徒一人一人が、自ら課題を見つけ、思考力や判断力等を働かせながら課題解決に迫る方法を工夫して、課題を追究しようとする課題解決的な学習を行ってきた。児童・生徒が、主体的な学習の仕方を身につけながら、文字を学ぶことの楽しさや課題達成の喜びを味わうことができれば、次の学習への意欲が高まり、日常生活の中に書写で学んだことを生かしていこうとする能力や態度の育成につながると考えたからである。

以上、書写指導の課題や児童・生徒の実態を踏まえ、昨年度の研究を生かしながら、本年度も「自ら課題を見つけ、主体的に取り組める書写指導法の研究」という主題を設定し、研究を進めることとした。

II 研究の構想

1. 研究の基本的な考え方

これからの書写学習においては、児童・生徒が自分の課題を見つけ、それを追究し解決する学習活動を重視する必要がある。文字を正しく整えて書くためには、どうすればよいかという課題を見つける力や、その課題の解決方法が分かり主体的に取り組める力の育成が大切である。本研究では、課題解決的な学習活動を通して、児童・生徒の文字に対する関心や意識を高め、文字を正しく整えて書く能力を伸ばし、学習したことを日常生活の中に生かしていこうとする児童・生徒を育てるために、次の2つの方法に焦点をしぼり、研究を進めることとした。

(1) 自ら課題を見つけるために

児童・生徒が個別の課題を見つけるためには、教材文字の基準を明確にすることが必要である。そのためには、学習のねらいの達成に適した教材文字を選び、視聴覚機器等を用いて学習基準の提示方法を工夫することが大切である。また、教材との出会いを大事にした導入の方法を工夫して学習への関心や意欲を高め、実態調査を基に児童・生徒の課題づくりを支援することも重要であると考えた。

(2) 主体的に取り組めるために

児童・生徒が主体的に取り組むためには、個別の課題を解決するための方法を理解し、見通しをもって活動できることが大切である。また、自分の課題への取り組みを振り返って確かめたり、課題達成の喜びを味わうことも大切である。そのための手立てとして、個々の課題解決に適した練習用紙の工夫、適切な自己評価や相互評価の工夫、視聴覚機器等の活用の工夫を考えた。さらに、学習したことを日常生活に生かしていくための発展学習の工夫も重要であると考えた。

2. 研究の方法と手順

(1) 研究の組織と方法

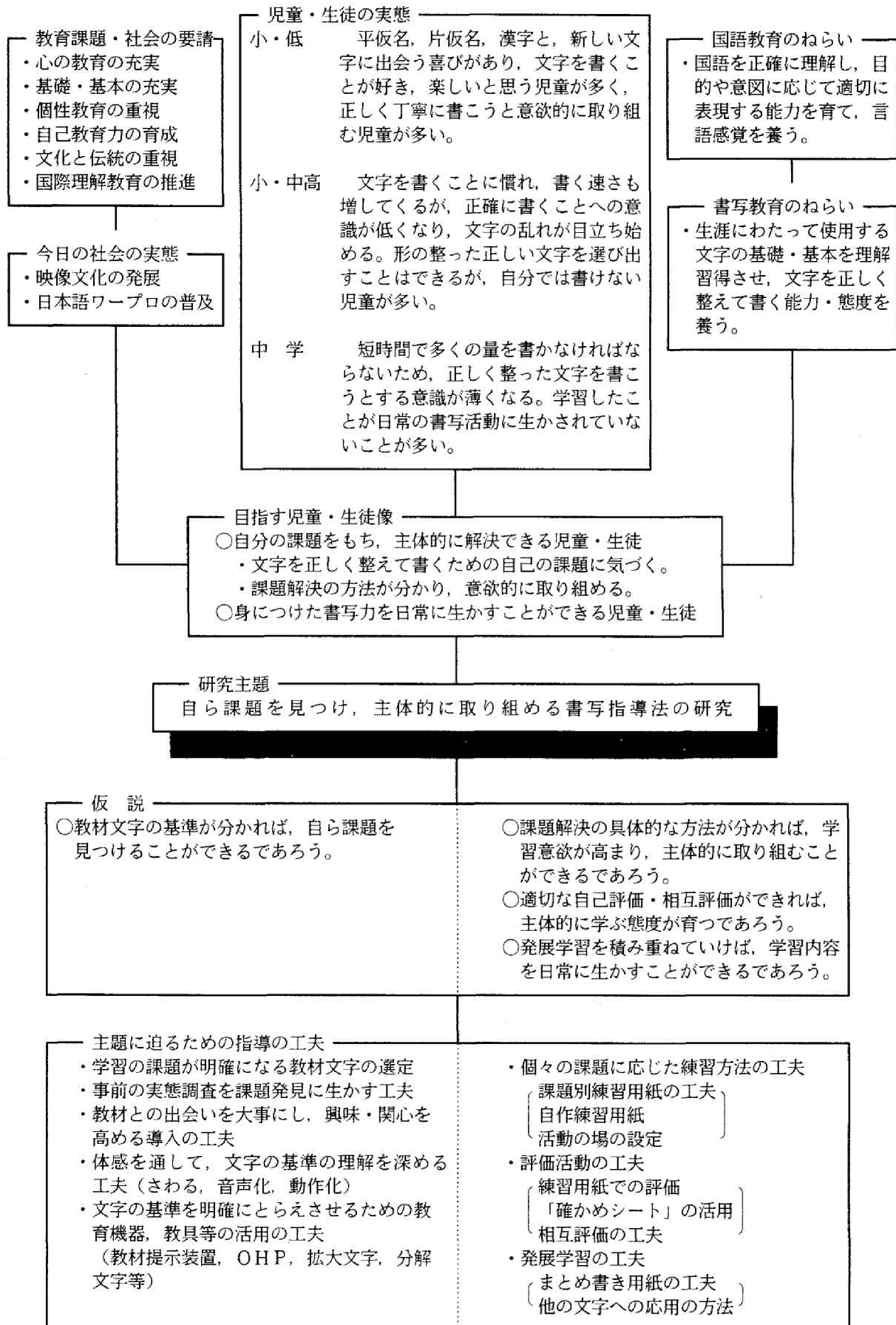
本年度の研究員は、小学校低学年2名、中・高学年3名、中学校5名、計10名である。そこで、小学校、中学校の2分科会を組織し、さらに、小学校低学年硬筆指導班、小学校中・高学年硬毛関連指導班、中学校硬毛関連指導班の3つの班を編制した。小・中学校の関連を踏まえ、相互に関連を図りながら研究を進めた。

(2) 研究の経過

1学期は、研究員相互の書写指導の様子を報告し合い、昨年度の研究の成果や課題を踏まえながら研究授業を行い、研究内容を検討した。御岳の研究集会では、1学期の研究内容をまとめて、研究主題のとらえ方を一層明確にし、仮説を立て、指導の手立てを考えた。2学期は、分科会ごとに、より効果的な指導法を考え、研究授業を通して検証した。全体会における研究授業は次の通りである。

6月2日	小1年	「とめ、はらい」	9月27日	中1年	「行書」
6月24日	中1年	「筆順」	10月17日	小2年	「点や画の方向」
7月5日	小6年	「文字の組み立て方」	10月31日	小3年	「そりとはね」

3. 研究の全体構想図



Ⅲ 研究の内容

1. 小学校低学年硬筆指導班

小学校低学年においては、文字を書くのが好き、楽しいと感じている児童が多く、正しく丁寧に書こうと、意欲的に取り組む児童が多い。しかし、技術が伴わず、また、細かい部分の書き方が分からないために、自分の書く文字に自信がもてない児童もいる。そのため、低学年では教材文字との出会いを工夫し、興味・関心をもたせることにより、意欲的な取り組みにつなげていくことが大切である。また、言葉だけでは学習の基準を理解できない児童もおり、視聴覚機器を活用したり、体感させたりすること等が有効である。

(1) 自ら課題を見つけるために

児童一人一人が自ら課題を見つけるためには、教材文字の基準を明確に理解することが必要であると考えた。そこで文字の基準を分からせるため、下記のような取り組みをした。

ア 適切な教材文字の選定

その文字を指導することによって、課題が明確になり、他の文字への応用ができるような文字の選定を行った。

学 年	教材文字	め あ て	選 定 し た 理 由
1 年 生	(例) と り	文字の終わりに気をつけよう。	とめ、はらいがはっきりしている。言葉としてとらえやすい。
2 年 生	(例) 地 語 林	画の向きや、長さに気をつけよう。	一つの文字が他の文字のへんの部分になると、「縦長」「右上がり」になることがはっきりしている。

イ 体感させる

空書きの時に音声化・動作化を行なった。

とめ……………ン（首をとめる。）

はらい……………スー（はらいに合わせて、体を動かす。）

はね……………ピョン（空書きをしながら跳びはねる。）

粘土を使って文字を作らせたり、分解文字を手でさわったりさせた。

ウ 視聴覚機器の活用

OHPや教材提示装置を使用した。シートに毛筆で示範し、硬筆では分かりづらい、とめ、はらいの違いをはっきりとらえさせた。その際、はじかないように墨液中に中性洗剤を数滴入れて書いた。画数の多い文字の書き順指導では、コンピュータを使用した。一画ごとに色を変えて、自分たちで確かめられるようにした。教材提示装置は、取扱いが簡単なおえ児童と対面して操作できること、また、部分拡大や色づけが可能で、教師や子供の書いた文字がそのまま使えるといった利点がある。視聴覚機器を利用することは、児童がより集中して授業に臨み、細かな部分の違いに気付くうえでも役立った。

エ 実態調査を生かす

日常児童が書いている文字の中から、本時の目標に関連のある文字をあらかじめ調査しておき、それを基に、授業で一人一人の「めあて作り」や、練習する際の助言や机間指導に役立てた。2年生では、言べんの右上がりか課題となる児童が多いことが分かり、事前に「確かめシート」(P13参照)や練習用紙を工夫することができた。

(2) 主体的に取り組むために

主体的に取り組むためには、児童一人一人が課題を解決するための具体的な方法が分かり、文字を適切に評価できることが大切なことと考えた。そこで自分の取り組みを確認しながら学習できるように、下記のような取り組みをした。

ア 練習用紙の工夫

個々の課題に応じた練習用紙を選択させた。文字別練習用紙は、色別に用意し、児童が選ぶやすいようにした。字数をあまり多くせず、マスのは大きさは、鉛筆の場合2.5cm四方、フェルトペンの場合3cm四方とした。用紙ごとにねらいがはっきり分かるようにし、一枚の用紙の中に中心線や補助線等の入ったマス目も書くようにした。

イ 評価活動の工夫

練習用紙に自己評価の欄を設け、めあてを意識しながら練習できるようにした。自分のめあてに沿って学習できているか、「確かめシート」等を使い、練習の途中で自己評価をしながら学習させた。

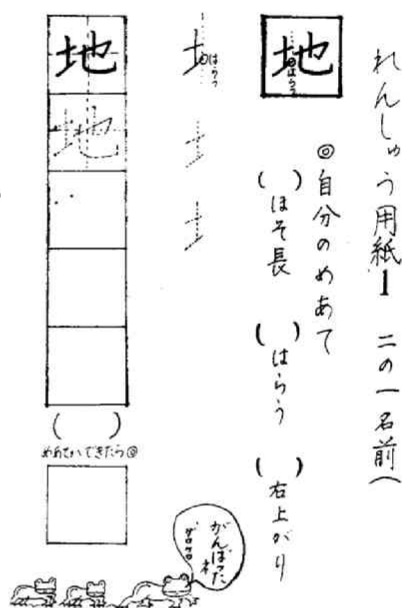
ウ 視聴覚機器の活用

教材提示装置を利用し、学習途中に相互評価をし、めあてに沿って学習しているか確認し合ったり、まとめ書きのあと児童の文字を紹介したりした。自分の書いた文字が映像化されることで、児童は満足感を味わうことができた。

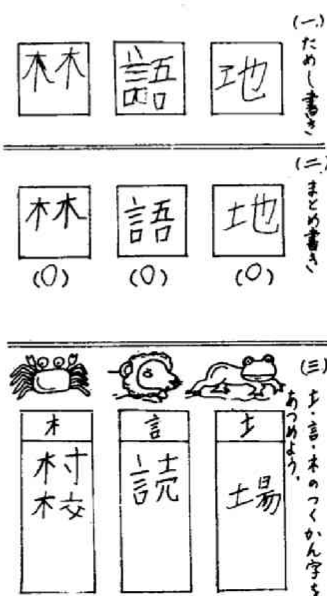
エ 発展学習の工夫

本単元で学んだことを日常生活に生かしていけるよう、同じ要素の文字を探したり、実際に書いてみた。また、ふだんノートに文字を書く時にも気をつけるよう指導した。

【練習用紙の例】



【発展学習の例】



2. 小学校中・高学年 硬毛関連指導班

低学年の頃は、文字を書くことに慎重に取り組んでいた児童も、中学年、高学年と学年が進むにつれて、文字を書くことに慣れ、書く速さも増してくるが、正確に書くことへの意識が低くなり、文字の乱れが目立ち始める。形の整った正しい文字を選び出すことはできるが、自分では書けない児童が多くなる。

中学年から始まった毛筆の指導では、大きくはっきり書けるため、文字の形を習得しやすいという利点がある。さらに、児童にとっては目新しさもあり、興味・関心もあるので、毛筆により書写の基礎・基本を身につけさせながら、硬筆へと意識化させていった。

(1) 自ら課題を見つけるために

ア 実態調査を生かす

教材文字と同じ要素をもった文字を硬筆でいくつか書かせたところ、中学年では、「そり」と「はね」に課題をもつ児童が多かった。高学年では、「へんとつくり」の幅がつかめない児童がほとんどだった。指導者は、あらかじめ児童一人一人の課題を把握しておいたので、児童の課題作りの支援に有効であった。また、練習用紙もそれを生かして作成できた。

イ 体感させる

中学年では、毛筆のはらいを指導する際、厚紙の分解文字を触らせてみた。先が「スーッと細くなっている」「とがっている」という感覚から、先が細くなるようにはらうということに気づいた。

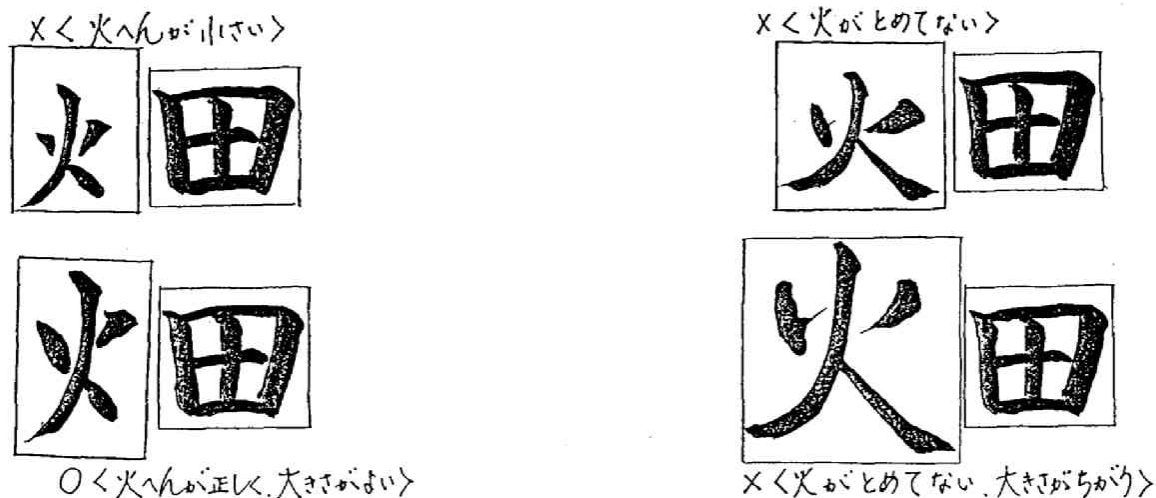
ウ 視聴覚教材の活用

教材提示装置は、指導者が児童を見ながら操作できる、指導者も扱いやすく書きやすい、どの席の児童にも筆使いがよく見える、一部分を拡大して見ることができる、児童を画面に集中させることができるなど、利点が多かった。

エ 拡大文字・分解文字の活用

高学年の毛筆「左右の組み立て」では、へんとつくりがどの位の大きさに釣り合うのかを、4種類の大きさのへんとつくりから組み立てた。試し書きでは、様々な大きさだった「へんとつくり」が、正しく組み合わせられるようになった。

【左右の組み立て例】



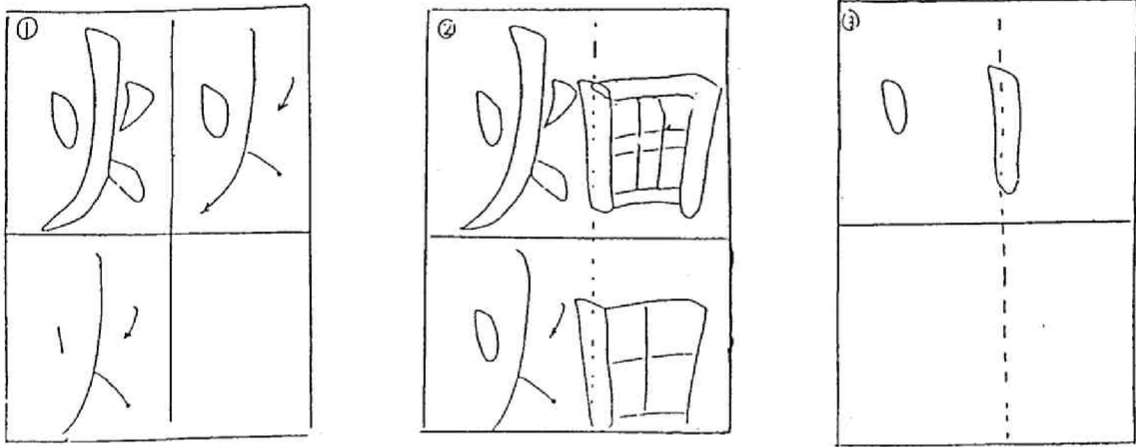
(2) 主体的に取り組むために

ア 練習用紙の工夫

課題達成に適した練習用紙を選択させた。段階的な練習用紙を用意したが、必ずしも全ての用紙を使うのではなく、同じ箇所を何回練習してもよいこととした。それによって個人の課題を自分で解決していくことができた。

高学年では、教材によって指導計画の中に自作練習用紙を取り入れたりした。

【練習用紙例】



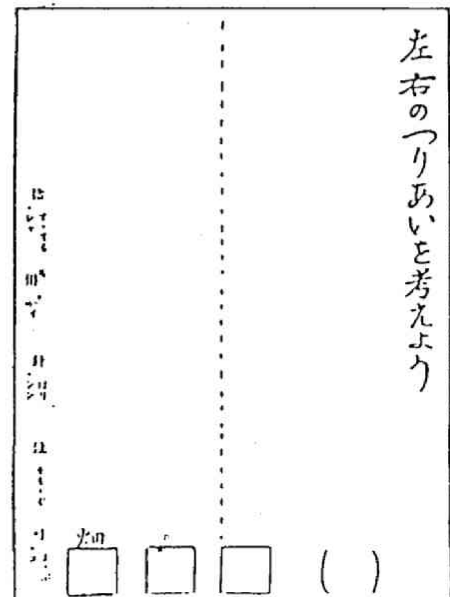
イ 評価の工夫

常に練習用紙に評価欄を設け意識づけた。練習途中で、「確かめシート」を使っての自己評価も行なった。試し書きとまとめ書きを比べ成果を評価できる欄も設けた。

ウ 発展学習の工夫

毛筆のまとめ書きの用紙の中に硬筆の練習の欄を設けて、毛筆の文字を硬筆でも練習する機会を作った。また、国語の教科書中の既習文字から、教材文字と同じ要素をもつ文字を選ばせて練習させた。練習文字の範囲を広げることにより、日常の書写活動につなげていくことができた。

【まとめ書き用紙例】



3. 中学校 硬毛関連指導班

中学校1年生が、1分間にどれくらいの文字が書けるのかという調査の結果が表1である。筆記具は鉛筆、国語の教科書から抜粋した説明文を、縦罫線のみ入った用紙に視写させる方法をとった。1回目は、ふだんノートに写すときの速さで書かせた。その結果、50%強の生徒が1分間に21~30文字を書いていることが分かった。2回目は、互いに競争させた。すると75%の生徒は31文字以上を書いていることが分かった。ほとんどの生徒が、速さも増し文字量も増えている。一方で、その文字に対し「きたない・雑だ」という意識をもっていることも事実である。これをそのまま中学校1年生の平均的な実態と見ることはできないが、1つの資料として参考になった。

また、この調査の後に速く書いた文字に対する意識調査も試みた。その結果が表2である。私たちは、そこに表れた生徒の意識に注目した。読みやすく整った文字を速く書きたいかという問いに対し、「そうしたい」と答えている生徒の数は全体の約90%にのぼる。この数字の高さは、文字を正しく速く書くことへの強い願望の現れであろう。

さて、中学校1年生の書写指導では、行書の単元が設けられている。先に記した生徒の意識を常に念頭において行書指導を考えていかねばなら

ない。そのような観点に立ちながら、行書の導入段階において、本研究主題に即して研究を続けた。

(1) 自ら課題を見つけるために

ア 視聴覚機器の活用

① 行書の導入の段階で生徒の日常の文字をOHPで紹介した。

友達の文字を知り合うこと、さらに、ふだん何気なく書いている文字の中にすでに行書体が表れていることを認識できることなどから、行書を身近に感じることができ、関心を高めるのに効果的であった。また、生徒が行書体の文字を見てとらえた様々な特徴を、一覧にまとめたものを提示しながら、前時の復習をした。学習内容が明確に分かり、スムーズに進めることができた。

【生徒の文字例】

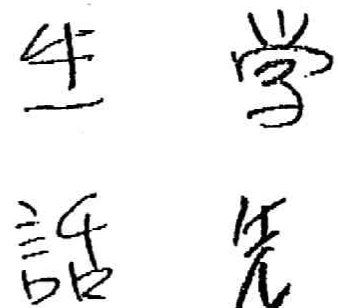


表1 1分間に書ける文字数に対する人数の割合

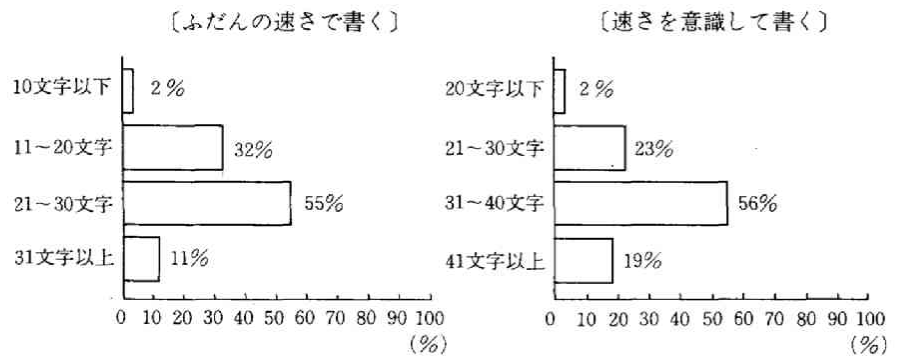
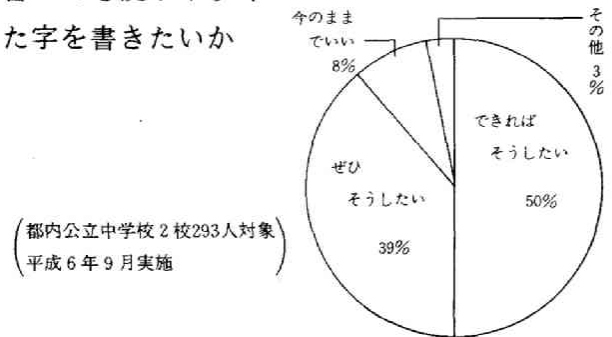


表2 速く書いても読みやすく整った字を書きたいか



- ② 拡大文字を使って文字の基準を発見させた。

模造紙に教材文字を大きく書いたものを提示し、連続の様子を確認させた。また、矢印などの教具を補うことで、気脈の連続を明確にとらえることができた。視覚的に訴えることができても有効であった。

【拡大文字】



- (2) 主体的に取り組むために

ア 視聴覚機器の活用

- ① 練習の手順をOHPに映しておいた。

練習中、生徒が自分で練習の流れを確認できるように提示した。これにより主体的な学習を促すことができた。

イ 練習用紙の工夫

- ① 練習段階に応じた補助線や中心線を入れた半紙・更紙・中質紙を使用した。

更紙や中質紙は半紙に比べてサイズが大きい分、練習できるスペースも増えること、下にうつりにくいの

- ② 1枚の用紙に試し書きとまとめ書きを入れた。

練習前と練習後の変容をみるのに都合がよく、自己評価もしやすかった。

- ③ 硬筆による練習スペースも設けた。

日常生活に書写学習の成果を生かす意識を育てるために、毛筆の練習のあと硬筆での練習を取り入れた。生徒は練習で得た気脈の連続を、発展文字で応用して書いてみる作業に意欲的に取り組み、生徒に学習のめあてが理解されている様子がうかがわれた。

ウ 評価の工夫

- ① 細かな自己評価をさせ、自分のめあてを意識させた。

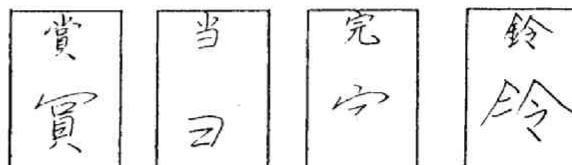
練習用紙による自己評価欄に書き込むようにして評価させた。それにより自主的な学習を促した。

練習の流れ
 ① 試し書きと手本を比べる。
 赤ペンで注意点に△印をつける。
 ② △印をもとに練習1→練習4を選んで練習する。
 毛筆と硬筆をおさらい↓自己評価の順
 ③ 自由練習とは部分練習でもよい。
 ④ 練習6には「光」と一字書いてみる。

- ② 相互評価により友達の文字の変容を確認しあった。

練習を終え、まとめ書きに入る前に、数名の生徒の文字を全体に提示した。練習の成果を認められることで生徒は意欲を高めた。生徒の文字を選ぶ際は、教師側の評価の観点をしっかりもつことが大切である。

【発展文字の例】



4. 単位時間の基本的な学習の進め方

本研究では、課題解決的な学習の進め方を取り入れ、児童・生徒が文字を正しく整えて書くことができる能力と態度の育成を目指した。すなわち、①自分の課題を見つける ②課題解決に迫る方法を考える ③自分なりの方法で取り組む ④自分の取り組みを振り返る さらに、⑤発展学習に取り組むという学習の進め方である。なお、以下に示す学習の進め方を基本としているが、児童・生徒の実態や学習のねらい、内容に応じて弾力的に授業を展開してきた。

	学 習 の 進 め 方 <例>	具 体 的 な 手 立 て <例>
と ら え る	<ul style="list-style-type: none"> ○教材文字を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・興味・関心，意欲の刺激 ○試し書きをする。（一枚だけ） <ul style="list-style-type: none"> ・筆順の確認 ・手本を見て，または見ないで書く ○学習のめあてをつかむ。 ○学習基準を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・どこをどのように書くかの観点や方法を明確に理解させる ○自分のめあて（課題）をつかむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習基準に照らし，試し書きから自分のめあてをもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ○適切な教材文字の選定 ○学習要素を含む文字探し 前時の感想文字カードの組み合わせ ○空書き コンピュータでの確認 ○児童・生徒が板書（筆順指導で） ○教材提示装置，OHP，水書板の活用 拡大文字の活用（気脈等） 分解文字の活用 グループ作業（部分の組み合わせで） ○「確かめシート」の活用 クレヨン，色えんぴつ等の使用
確 か め る	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のめあてに沿って練習する。 <ul style="list-style-type: none"> ・練習用紙の選択 ・自作練習用紙 ・自己評価 ○まとめ書きをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・めあての確認 ○評価をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・試し書き等との比較 ・自己評価，相互評価 	<ul style="list-style-type: none"> ○練習用紙の工夫 <ul style="list-style-type: none"> 課題別練習用紙 文字別練習用紙 自己評価欄 ○「確かめシート」の活用 ○まとめ書きに評価欄を設ける。 ○児童・生徒の学習成果の紹介
広 げ る	<ul style="list-style-type: none"> ○発展学習をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・硬毛関連，他の文字への応用 ○学習のまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まとめ書きに発展学習欄を設ける。 文字探し。同じ要素をもつ文字を探して書く

※発展学習については、必ず単位時間内に行うというように固定的に考えず、単元全体の中に組み入れる場合もある。

IV 実践事例

<小学校 第2学年>

1. 単元名 点や画の方向
2. 教材 「地」「語」「林」
3. 単元設定の理由

第2学年の書写に関する指導事項として「点画の接し方，交わり方，方向などに注意して，文字を正しく書くこと」があげられている。児童が文字の形を見分けるには，文字の全体的な形や文字の部分的な特徴などがその手がかりとなる。文字の部分の差異をはっきり知ること，文字を整える上でも大切なことであると考え，本単元を設定した。

なお，研究主題に迫るための手立てとして次のような工夫をした。

- ・自ら課題を見つけるために………単独文字を組み合わせたものを示すことによって「おや，変だぞ」という児童の気持ちを引き出し，手本との違いを見つけやすくし，課題をしっかりと把握できるようにした。
- ・主体的に取り組むために………文字別練習用紙を準備し，それぞれの文字に対するめあてを確認させたり，自己評価をさせることによって，一人一人が自分のめあてに向かって主体的に取り組むことができるようにした。

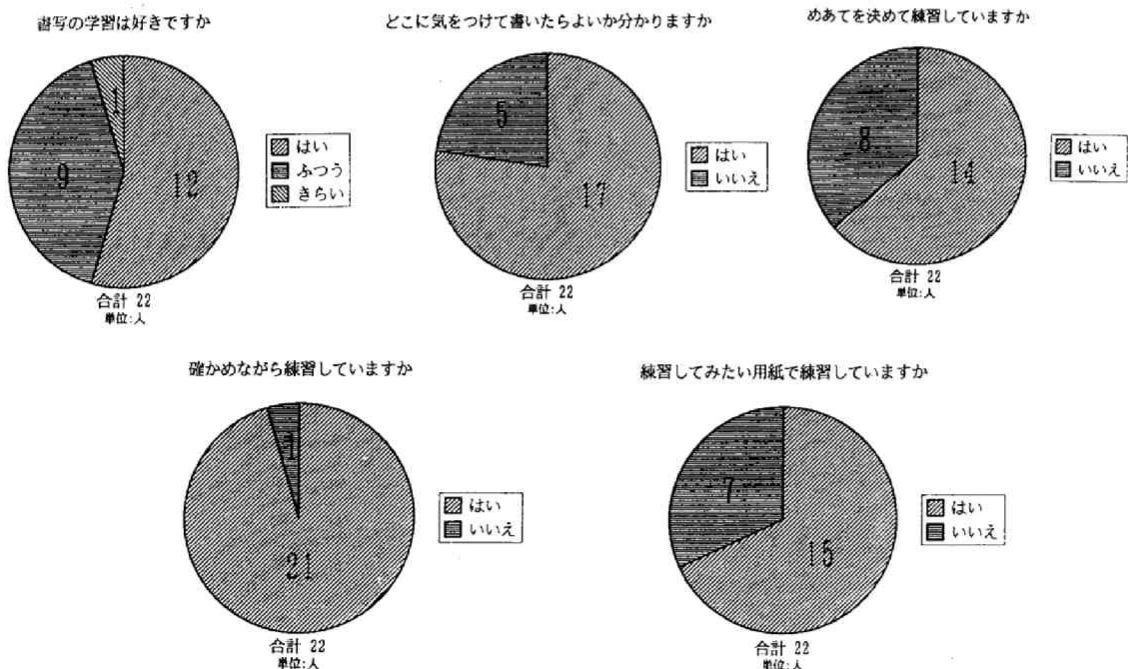
4. 単元の目標

点画の方向，間隔に注意して，字形を整えて書くことができる。

5. 児童の実態

事前に行なった，書写意識及び書写技能に関する調査の結果は，下記のとおりであった。

- ・書写意識に関する実態（H6. 10. 5 質問紙法）



・書写技能に関する実態

日常使っているノートの文字から①土へん②言べん③木へんのつく文字（場，読，村）を選び，不十分な箇所を調べてみた。

①土へんに関して不十分な箇所……………	右上がり	7名
	細長	2名
	はらい	4名
②言べんに関して不十分な箇所……………	右上がり	15名
	2画目が長い	3名
③木へんに関して不十分な箇所……………	右上がり	6名
	とめ	7名

【学習課題の例】



・1画目を右上がりにする。・右上がりにする。右にそろえる。・4画目を短くとめる。

この結果を児童一人一人の「めあて作り」に対する助言や机間指導に生かすよう努力した。

6. 指導計画

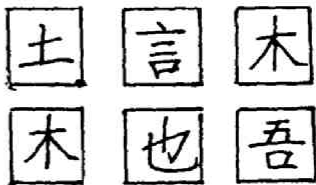
- ・第1時 点画の方向，長さに注意して書く。（本時）
- ・第2時 点画の方向，画と画の間隔に注意して丁寧に書く。


7. 本時

(1) 目標

- ・めあてをもって，進んで学習しようとする。
- ・点画の方向，長さに気をつけて書くことができる。

(2) 展開

	学 習 活 動	指導上の留意点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1. 教材文字を知る。 「地」「語」「林」 2. 試し書きをする。	・カードを組み合わせ， 3文字を作り，教材文 字を知らせる。 ・コンピュータで書き順 を確かめてから試し書 きをさせる。	・カードを組み合わせ，教 材文字への興味・関心をもたせる。 

と ら え る	3. 学習のめあてをつかむ		
		画の向きや、長さに気をつけて書こう。	
確 か め る	4. 学習の基準を知る。	<ul style="list-style-type: none"> 手本と組み合わせた文字を比較し、違いを見つけさせる。 (とめ、はらい、細長右上がりなど) 自分の試し書きと手本を比べ、直すところを見つけ、直させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材提示装置での拡大文字でへんの部分だけを朱書きにし、自分のめあてを意識づける。
	5. 自分のめあてをもつ。 (直すところを赤で書く)		
確 か め る	6. 自分のめあてに沿って練習する。	<ul style="list-style-type: none"> 点画の方向、長さを再確認させる。 めあてを確認させる。 練習の途中で自己評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 文字別練習用紙は、色別に用意し、児童が選んで練習できるようにする。 点画の方向、長さ、形に着目させる。 *「確かめシート」
	7. まとめ書きをする。 8. 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> めあてを確かめてからまとめ書きをさせる。 試し書きと比べ成果を確かめさせる。 めあてが達成できた児童の文字を紹介する。 	
広 げ る	9. 発展学習をする。	<ul style="list-style-type: none"> 今日の学習内容を他の漢字にも生かすことができることを知らせる 	<ul style="list-style-type: none"> 「土へん」「言べん」「木へん」などのつく漢字を見つけさせ練習させる。

(3) 評価

- ・めあてをもって、進んで学習しようとしていたか。
- ・点画の方向、長さに気をつけて、書くことができたか。

*「たしかめくん」は、コンピュータで作成しOHPシートにカラー印刷し、見やすくなるよう工夫した。

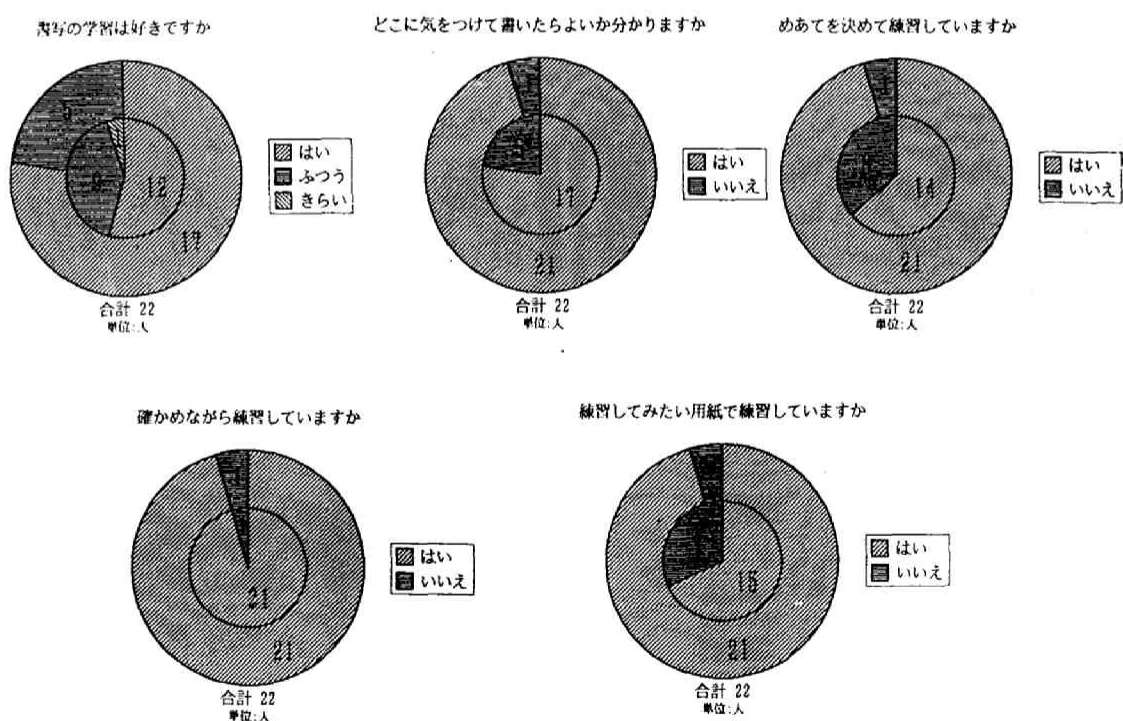
8. 考 察

文字カードを組み合わせながら教材文字を知らせたことにより、児童は興味・関心をもって教材文字と出会うことができた。また、文字の画数が多くなると、低学年の児童は、空書きだけでは理解が不十分になるので、コンピュータを利用した書き順指導は効果的であった。次に、めあてをはっきりさせるために、教材提示装置を使用し、へんの部分を朱書きにしたことも文字の基準を明確にし、それぞれが自分のめあてをつかむ手助けになった。

練習用紙については、文字別練習用紙を色別に分けて選択できるようにし、練習の途中で「確かめカード」（「たしかめくん」）を用い自己評価を行い、めあてを確認しながら進むようにした。このような練習方法で、児童は自分の文字を評価しながら主体的に取り組むことができた。練習時の文字数については、多すぎても雑になってしまうので、児童の実態に応じてゆとりをもって取り組ませたい。

発展学習では、本時の練習を生かして、土へん、言べん、木へんのつく文字を既習文字から探し、点画の方向や長さに気をつけて書くことができた。

指導者は常に、日常のノートから児童の実態を把握し、一人一人の学習課題をつかんでおくことが児童を支援していく際に大切だということが分かった。



内円は授業前、外円は授業後の意識調査の結果である。この結果を見てもそれぞれのめあてに沿って練習用紙を選択し、確かめながら学習しようとしているのが分かる。

<小学校 第3学年>

1. 単元名 そりとはね
2. 教材 「子牛」
3. 単元設定の理由

3年生では、学習する文字数やその画数が増えるとともに、慣れや繁雑さもあって筆順の乱れ、細かな所への注意力も不足しがちとなるため、字形の乱れが目立ち始める。しかし、毛筆を使用する最初の学年であり、書写に対する児童の関心は高く意欲的である。毛筆書写においてこの時期を逃すことなく、正しく丁寧に書くための基礎・基本をしっかりと押さえることが、硬筆書写の基礎を培い、確かな書写力を育てるものとする。

ここでは、基本となる点画の筆使いや画の長短に注意して、文字を正しく書くことをねらっている。さらに毛筆で学習したことが、硬筆にも生かされるよう本単元を設定した。

なお、研究主題に迫るための手立てとして、次のような工夫をした。

文字の基準を明確に把握させるために、拡大文字の提示や分解文字の操作を取り入れ、視覚的にとらえることで、個々のめあてを明確にできるようにした。さらに、課題解決に向けて一人一人の児童が主体的に取り組めるように、個々のめあてに沿った要素別の練習用紙を準備し、めあてが常に意識できるよう自己評価欄を設けた。

また導入においては、児童の興味・関心を喚起し、意欲的に取り組む姿勢づくりにつながるような教材との出会いを工夫した。そして、日常化に結びつける発展学習として、同じ要素を持つ文字をフェルトペンでの練習を取り入れ、硬毛の関連を図った。

4. 単元の目標

- ・そり、はねの筆使いや画の長短に注意して書くことができる。
- ・毛筆で学習したことを生かして硬筆でも書くことができる。

5. 児童の実態

事前に、書写意識及び技能に関する調査を行った。その結果は右記の通りであった。

・書写意識に関する実態

毛筆書写が始まり、毎時間楽しみにしている児童がほとんどである。「書くことが楽しい」「きれいに書けるから好き」と書く喜びを感じている。そして、(5)では、「習った漢字を使っていない」「あわてて書くので雑」「鉛筆の持ち方がだめ」「払ったりはねたりしていない」「書き順が正しくない」「きれいに書きたい」と言ったことを上げている。これらのことから、児童が文字を正しく丁寧に書こうと意識し

書写に関する意識調査 調査年月 平成6年10月12日(水)
調査人数 30名
調査方法 質問紙法

(1) 文字を書くことが好きですか。その理由も書きましょう。

す	き (13)	ふ	つ	う (16)
---	--------	---	---	--------

「きれい(1)

(2) 書き方の学習は楽しいですか。その理由も書きましょう。

毛筆	楽しい (22)	ふつ	う (6)
----	----------	----	-------

「楽しい(2)

硬筆	楽しい (15)	ふつ	う (13)
----	----------	----	--------

「楽しい(2)

(3) めあてを決めて練習していますか。

は	いい (25)	いいえ (5)
---	---------	---------

(4) めあてを確かめながら練習していますか。

は	いい (18)	いいえ (12)
---	---------	----------

(5) あなたの文字で気がついたことを書きましょう。

※(1)と(2)の理由、(5)の内容について詳細は省略。児童の実態として考慮する。

ていることが分かる。また課題解決的な学習については、個々のめあてはもてるようになってきているが、めあてに沿っての練習となると全体の形にとらわれたり、どの練習用紙を使えば良いのか分からなかったりしている。

・技能に関する実態

日常使用しているノートの文字から「字」を選び、「そり、はね」について調査した。

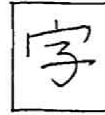
正しく書けている児童は5名に過ぎなかった。

そり、はねともに不十分な児童……………10名

そりの不十分な児童……………14名

はねの不十分な児童……………3名

という実態である。一人一人の字形の実態を見ると、姿勢、用具の扱い方、筆順の乱れが少なからず影響していることが分かる。



・そりをめあてとして取り組ませ、姿勢を正しくして書くよう支援する。



・そり、はねともに取り組ませ、用具の扱い方、筆順、姿勢を正しくして書くよう支援する。

6. 指導計画

- ・第1時 そり、はねの筆使いに注意して、「子」を毛筆で書く。
- ・第2時 画の長短に注意して、「牛」を毛筆で書く。
- ・第3時 そり、はねの筆使いに注意して、「子牛」を毛筆で書く。
- ・第4時 毛筆で学習した筆使いや画の長短を生かして、文字や語句を硬筆で書く。

7. 本時の指導

(1) 目標

- ・めあてをもって進んで活動し、丁寧な書こうとする。
- ・そり、はねの筆使いに注意して、毛筆で「子」を書くことができる。

(2) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1. 教材文字を知る。 「子」 2. 試し書きをする。 3. 学習のめあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・「丿」に着目させ、「丿」の使われている文字を発表させる。 ・子、家、字、教、手、学の拡大文字を掲示する。 ・「子」について学習することを確認する。 ・体全体を使って、大きく空書きし、ウォーミングアップさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「子」の分解文字を提示し、興味・関心をひき、学習意欲を高める ・拡大文字で視覚的にとらえさせる。 <div style="text-align: center;"> <p>分解文字</p> </div>

そりとはねに気をつけて書こう		
と ら え る	<ul style="list-style-type: none"> ・「そり」「はね」の部分を考える。 ・正しい「子」を作る。 <p>4. 学習の基準を知る。</p> <p>5. 自分のめあてをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・注意して書くところをクレヨンで直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分解文字「 」に、チョークで色分けして部分を明らかにする。 ・「子」の分解文字を使って正しい「そり」「はね」を見つけさせる。 ・文字の中心を意識させながら、3画目につながるように「そり」「はね」の筆使いを示す。 ・基準に照らし、試し書きを見直しさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・教材提示装置で「そり」「はね」の筆の動き視覚的にとらえさせる。 ・自分のめあての意識化を図る。
確 か め る	<p>6. 自分のめあてに沿って練習する。</p> <p>7. まとめ書きをする。</p> <p>8. 自己評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてに応じた練習用紙を選択させる。 ・適切な練習用紙かどうか助言する。 ・自己評価させながら書かせる。 ・「そり」「はね」に気をつけることを再確認する。 ・試し書きと比べ、成果を確かめさせる。 ・めあての達成のできた児童の文字を紹介する。 <ul style="list-style-type: none"> ・練習用紙は要素別に自由を選択させる。 ・めあてを意識させ、達成できたか確かめさせる。
広 げ る	<p>9. 発展学習をする。</p> <p>10. 次時の学習を知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・導入の拡大文字の中から選んで、フェルトペンで書く。 ・画の長さについて学習することを伝える。 <ul style="list-style-type: none"> ・日常化を図る。

(3) 評価

- ・めあてをもって進んで活動し、丁寧に書こうとしていたか。
- ・そり、はねの筆使いに注意して、書くことができたか。

8. 考察

「子」の分解文字「丿」を提示しての導入は、児童の学習意欲を高めるばかりでなく、本時のめあてを強く意識づけることにつながり、最後までめあてをもち主体的に取り組むことができた。また、60cm四方に教材文字を拡大した上で、そり、はねの部分を確認めたり、分解文字にして正しい文字を見つけたりする学習活動は、どの児童にとっても楽しいものであり、興味・関心をもって取り組むことができた。拡大文字や分解文字は、大きく見やすいので、めあてをつかむうえで有効

であった。さらに教材提示装置は、画面が鮮明なため、穂先の細かな動きがよく分かり、児童が個別のめあてをしっかりとつかむうえで、有効な方法であった。批正の際、クレヨンを使用した。クレヨンは太く折れにくく、下敷きがあっても書くことができるうえ、児童の身近にあるので、利用価値が高い。



練習用紙については、要素別に

3枚用意したが、3年生にとって大きさ、選択枚数とも適切であった。また、常にめあてが意識できるよう、あるいは丁寧に取り組みできるように、どの練習用紙にも自己評価欄を設けたが、そのことにより意識化が図られた。

発展学習においては、導入で扱った拡大文字の中から好きな文字を選んでフェルトペンで書いた。そのことにより毛筆での学習が硬筆に生かされ、硬毛の関連を図ることができた。

今後の課題として、形にとらわれて色ぬりになりやすい籠^{かご}字より、より効果的な練習用紙の作成を検討する必要がある。そして練習用紙選択の際、児童が自席を離れて各自の課題に沿った練習用紙を選択するために、落ち着いた雰囲気づくりを考える必要がある。広いスペースの確保と併せて、よりよい用紙選択の方法を考えていきたい。また、児童は毛筆での練習を硬筆にも生かしていたが、はねの方向に迷いがみられた。入門期の3年生に、そりとはねの2つの筆使いを同時に取り扱うことが適切であるかどうか、あるいは基本点画の中でも難しいはねを先に扱った方が、より効果的であるのかなど、児童の実態、年間指導時数をも考慮の上、適切な指導計画を練る必要がある。

指導後の児童の実態は、27名の児童がそり、はねを意識し丁寧にフェルトペンで書いており、ノートへの記録にも注意が払われていた。今後も適切な場面をとらえ、指導・助言し確かな書写力を育てたい。

<中学校 第1学年>

1. 単元名 行書
2. 教材 「光」
3. 単元設定の理由

中学校の授業では生徒のノートへの筆記量も増え、生徒は行書という意識をもたずに、目的や必要に応じて速さを変えて書いている。しかし、字形は正しく整っているとは言えない。そこで、行書の基本的な書き方を体系的に理解・習得させることによって、日常的に文字を正しく整えて速く書く能力や態度を養いたいと考え、本単元を設定した。

なお、研究主題に迫るための手立てとして、次のような工夫をした。

行書の入門期であるので、興味・関心を喚起し、意欲を高めるための導入を考え、行書の特徴と意義について理解させるようにした。その上で学習項目を段階的に設定し、教材文字を選定した。そして文字の基準を明確に把握させるため、拡大文字を用いて気脈を視覚的に示したり、空書きで体感させたりした。

また、各自の課題に沿った練習と自己評価が主体的に行えるように、練習用紙を工夫した。

4. 単元の目標

- ・行書の特徴や基礎的な書き方を理解し、文字を正しく整えて速く書く能力を身につけることができる。
- ・硬筆と毛筆を関連させて学習し、行書を日常の書写活動に進んで生かすことができる。

5. 生徒の実態

急いで書いたときの自分の文字について、ほぼ全員が「雑、きたない、下手」といった否定的な評価をしている。実際に書かれた文字を見ても、自己流のくずし字(a)や、楷書の点画が離れているもの(b)、終筆が流れているもの(c)等が多く、正しい行書法によるものは少ない。

また、「花」の楷書と行書を示して行書の特徴を挙げさせると、「連続する、速く書けそう、柔らかい感じ、形が変わる」等に交じって、「雑、昔の字、間違っている」という回答が10%にもものぼる。これは、生徒に行書という概念や知識がないためと思われる。しかし、「文字を正しく整えて速く書きたい」という欲求は約90%の生徒がもっており、正しい知識・理解に基づく日常の書写活動の必要性が分かる。

6. 指導計画

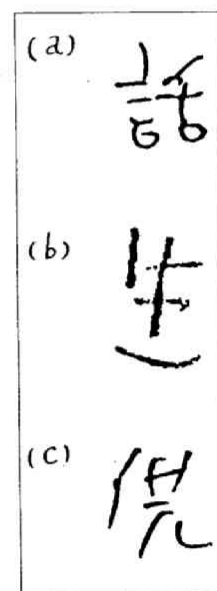
第1時 生徒の実態調査。行書の特徴と意義について理解する。

第2時 前時の実態調査を基に行書の特徴についての理解を深め、学習課題を項目立てる。
点画の連続を理解して書き、日常よく使う漢字にもあてはめて書く。……「光」

第3時 点画の連続、字形の変化を理解して書き、発展文字を硬筆で書く。……「平和」

第4・5時 字形・筆順の変化を理解して書き、発展文字を硬筆で書く。……「紅葉の秋」

第6時 前時までの学習を基に、掲示物の文字や友人の氏名などを行書体で書き、発表し合う。(日常化・生活化)

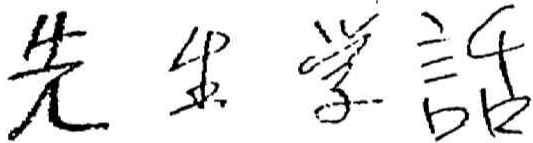



7. 本 時 （6時間扱いの2時間目）

(1) 目 標

- ・自分の文字，友人の文字に対し，適切に評価できる。
- ・点画の連続及び気脈を確認し，それらを意識して書ける。
- ・「光」や「光」の書き方を，他の文字に応用して書ける。

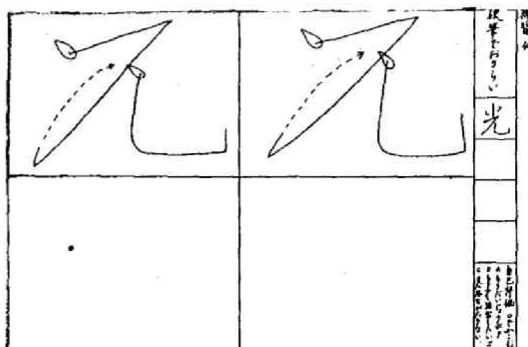
(2) 展 開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1. 行書の特徴について復習し，学習課題を項目立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の実態調査から無意識に書かれた行書字例をOHPに示し，行書の特徴について確認させる。 「先」「生」「学」「話」 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の実態を意識化させ，行書に対する興味・関心をもたせ意欲の高揚を図る。
	2. 教材文字を知り，学習のめあてをつかむ。		
	点 画 の 連 続 に 注 意 し て 書 こ う		
	3. 試し書きをする。 (楷書を行書に直して書いてみる。)	<ul style="list-style-type: none"> ・楷書を模造紙で示す。 ・自由に空書きして連続の仕方やリズムを確認させてから書かせる。 ・「用紙①」の上半分に書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決法を予測させ主体的に試行させる。
	4. 学習基準を知る。 (正しい連続の仕方を理解する。)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に行書「光」の拡大文字を示し，気脈を赤矢印で補う。 4・5画目は直接連続しているが，他はどうか。気脈を意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大文字を用い，色彩的・視覚的に訴え，文字の基準を明確にとらえさせる。
5. 自分のめあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・手本・練習用紙を配布。 ・自分の試し書きと手本とを比べ，赤ペンで注意するところに△印をつけたり，書き込みをさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決への具体的方針を立てさせる。 	

確 か め る	6. 自分のめあてに沿って練習する。 ・練習用紙の選択 （部分練習②～⑥，全体練習⑦） ・毛筆→硬筆→自己評価	・学習の手順を説明し，OHPで示しておく。 ・時間設定をする。 ・練習の順序に注意させ，適切な用紙選択について指導する。 ・机間指導する。 ・部分練習の後，「練習⑦」に「光」一文字を書かせる	・各自の課題に応じて主体的に練習させる。 ・練習→自己評価を繰り返し，自己学習力を高める。
	7. 相互評価を行う。	・学習のめあてを確認し，試し書きとの比較で観点別に向上点を認められるようにする。	・成果を認めることでさらに学習意欲を高める。
	8. まとめ書きをする。	・「用紙①」の下半分に毛筆で書かせた後，硬筆でもまとめ書きをさせる。	・日常化を意識づける。
	9. 自己評価をする。	・試し書きと比較して，自分のめあてが達成できたか，確かめさせる。	
広 げ る	10 発展学習をする。	・本時の学習内容が他の文字にも生かせることを，発展文字を完成させることによって理解させる。	・日常生活に生かす態度を養う。

(3) 評 価

- ・行書の特徴について理解を深めることができたか。
- ・点画の連続を理解して「光」を書き，学習要素を他の文字に応用し，書くことができたか。



【練習用紙④】

【用紙①】



8. 考 察

(1) 教材文字について

行書学習の第1回として、行書の特徴の中でもすべての文字に見られる「連続」を扱い、それを焦点化するため、他の要素（省略、筆順の変化等）を含まない文字を選んだ。さらに、日常の書写活動に生かすという観点から、学習要素が広く他の文字に応用できるものを、と考えた。（例えば、「光」の4～5画目の「横画から左払いへの連続」は、「石・原・広・見・面」等、かなり多くの文字に応用することができる）。このため発展文字として扱える文字の幅が広がり、行書の学習を日常に生かそうとする態度が養われた。

(2) 導入について

実態調査を基にしたので、OHPに映し出された文字に興味深く見る生徒が多かった。

(3) 拡大文字について

拡大文字（白模造紙に墨書）に「見えない連続線」として赤で矢印を補ったのは、配色も良く、気脈をとらえるのに有効だった。

(4) 練習用紙について

用紙①を上下に分け、試し書きとまとめ書きの比較をしやすくした。また、同じ用紙に硬筆のまとめ書き・発展学習・自己評価欄も含めたので、学習の成果が把握しやすかった。

文字を分解して練習用紙を用意し選択させたため、より個別の課題が明確になり、主体的に取り組めた。

(5) 自己評価について

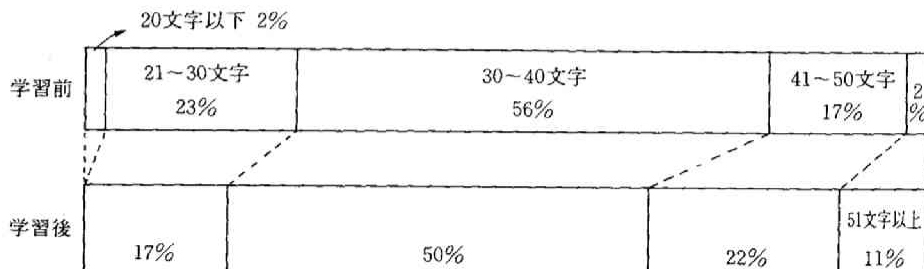
自己評価欄の選択肢に○印をつける形で行ったが、意欲や態度に関する評価方法などについて、今後も研究を深めていく必要がある。

(6) OHPの使用について

生徒の硬筆文字を示したり、学習の手順や方法を示すのに利用し効果をあげた。その他、楷書と行書を重ねて映して点画の長さや方向の変化に気づかせたり、示範して行書のリズムをつかませるのにもOHPは有効であった。

(7) 単元終了後の変容

第1時と同じ文章を使い、速さを意識させて書かせた。すると、30文字以下が17%に減り、31～40文字が50%、41～50文字が22%、51文字以上が11%となり、1分間に書ける文字数が増している。だが、これよりも注目すべきは、この時行書を使った（一部だけでも含む）と答えた生徒が約80%にもものぼり、文字の乱れも少なくなっていることである。また、67%の生徒が日常的にメモしたり記名したりする際に行書を使うと答えており、まだ不十分な文字もあるものの、学習内容を日常の書写活動に生かしていく態度がうかがえる。



【速さを意識して書いた時の1分間に書ける文字数の変容】

V 中学校における書写指導の時間確保

学習指導要領には、中学校各学年における授業時数が定められている。しかし、授業時数を確保するためには、指導内容や指導方法を工夫することが大切である。本年度は、中学校第2学年で、以下のような実践を試みた。

	国語の単元・行事等	書写指導にかかわる学習活動の例	書写指導上の工夫・用具
一 学 期	○作文 ○詩 ○七夕の短冊 ○短歌 ○読書新聞	○自己紹介文を書く ○教科書単元の詩を視写する ○短冊に自分の将来の希望を書く ○教科書単元の短歌のうち、気に入ったものを、短冊または半紙に行書で書く ○夏休みの宿題として、自分が読んだ書籍の粗筋、感想、作者紹介をB4判画用紙に3段で書き、ポスターにする	○原稿用紙に硬筆で丁寧に書かせる。 ○B5判上質紙にフェルトペンで書かせ、掲示する。 ○字形や字配りに注意させ、筆ペンを使用させる。 ○行書の特徴を的確に捉えさせ、小筆を使用させる。 ○サインペンまたはフェルトペンで、丁寧に書かせ、作品展示会で展示する。
二 学 期	○古典 ○年賀状 ○書き初め	○教科書単元の古典を視写する ○字の大小に気をつけながら書く ○冬休みの宿題として、課題を決め、臨書する	○なるべく速く、しかも丁寧に、字形を整え、硬筆を使用して書かせる。 ○小筆または筆ペンで十分に練習させ、年賀状に活用させる。 ○楷書・行書両方の手本を提示し、どちらかを選択させ、毛筆で書かせる。
三 学 期	○書き初め展 ○手紙	○展示物から他の生徒の筆使いや字配り等を鑑賞する ○10年後の自分にあてた手紙を書く	○「鑑賞の手引き」等を作成し、相互評価をさせる。 ○封筒、便箋、筆記用具は各自に用意させ、書体も楷書か行書かを各自に選択させる。

上記の年間指導計画と合わせ、授業中にできる書写指導も行っていく。例えば、ノート指導や新出漢字等の漢字指導を積極的に行い、日常書写活動が生徒に定着するよう、さらに工夫を重ねていく必要がある。

VI 研究のまとめと今後の課題

今年度の研究主題「自ら課題を見つけ、主体的に取り組める書写指導法の研究」に基づいて実践と検討を重ねてきた。児童・生徒の学習意欲を高めるための指導を目指した研究の成果は以下のとおりである。

- (1) 適切な教材文字の選定は、児童・生徒が自ら課題を見つけるのに有効であることが確かめられた。
- (2) 児童・生徒が自らの課題を解決するのを支援していくうえで、事前の実態調査等が有効であった。
- (3) 低学年においては空書きなどの動作化、音声化といった体感的な活動は、教材文字の基準を理解させる手助けとなった。
- (4) 視聴覚機器（OHP、コンピュータ、教材提示装置等）や教具（分解文字、拡大文字等）を効果的に活用することにより、学習基準を明確化できた。
- (5) 課題別に作成された練習用紙を使用することにより、個々に応じた課題解決のための主体的な取り組みができた。
- (6) 低学年では「確かめシート」等による自己評価、また全学年における練習用紙での自己評価、さらに高学年・中学校における相互評価等、評価活動について工夫することにより、主体的な学習態度を養うことができた。
- (7) 発展文字を含めた練習用紙の工夫により、日常の硬筆書写にも生かそうとする意識が高まった。
- (8) 小・中学校の連携により、系統的な書写指導の必要性が再確認され、日常の書写活動へ発展していくことの重要性が認識された。

なお、今後の課題としては、以下の点が挙げられる

- (1) 発達段階に応じた評価方法の工夫をさらに研究し、自ら課題を見つけ、意欲を高めるための指導の方法の研究を継続していく必要があること。
- (2) 毛筆での学習を日常書写に関連させる場合の筆記具については、より研究を進め、その効果を明らかにする必要があること。
- (3) 教室以外での書写活動についてより工夫し、広い多目的教室等の活用についても検討する必要があること。
- (4) 書写で学習した内容を日常に生かし、定着させていく方法について継続した研究の必要があること。
- (5) 硬毛の関連を念頭においた教材文字の系統的配列について研究し、小・中学校一貫した指導法を確立していく必要があること。
- (6) ティーム・ティーチングの方法について検討するとともに、個別指導と全体指導との関連についても調査研究していく必要があること。